明石の史跡（９０）鱣から蛸へ

『あかし昔ばなし』（神戸新聞明石総局編／昭和５８年刊）のなかに、「立石の井」という項目があり、そこには、次のような話が掲載されている。

むかし、林の西の岸崎というところに、「おきさき」（天皇の正妻。皇后。中宮。妻后つまぎさき＝広辞苑）が二人おられ、それを大蛸（足の長さが８～１２キロ）が拉致しようと、昼夜をとわず狙っていたという。それを退治したのが、二見の武士浮須三郎左衛門であった。かれは藤江の海に、蛸壺を沈めて、この大蛸を捕獲したものの、大暴れをして蛸壺から脱走。林神社の東の谷に追い詰めて、ものの見事にたたき切って、ときの天皇からご褒美をいただくのである。斬られた大蛸は石になり、やがてそこから清水が湧出して、酒造りに貢献する（同書８３－４頁）。

大蛸は、日本海沿岸によく見られ、近世には、但馬にも牛馬をとる大蛸の存在が報告されており（刀斑勇太郎著『蛸』７３頁）、瀬戸内における大蛸の話は、きわめてすくない。

ところで、『明石記』（享保頃の成立＝国書総目録１）をひもとくと、「岸崎＝きさき」の項に、ほぼ同様の話しが記録されていた。ただ異なる点が一つあり、「おきさき」に的をしぼったのが、大蛸ならぬ、「鱣（えい）」であった。鱣は、春になると近海にその姿を見せ、内湾にあつまる。何よりも注意すべきは、その尾には、長い棘と数本の短い棘があり、刺されると、非常な痛苦をともなう（末広恭雄著『魚の博物辞典』１１６頁）。藤江の沖では、１メートル級のものも、珍しくはないと聞く。

ある時期に、話の主役が、「鱣」から「蛸」へと変換したことは間違いない。手がかりの一つは、寛政９年（１７９７）初春に求板なった、『日本山海名物図会巻５』（日本名所図会全集）に、「章魚（たこ）」は「播州明石たこの名物也」とあるのに、目下のところ依拠したい。

日本歴史学会会員　　茨木　一成

立石の井